

井手宣通（いで・のぶみち 1912-1993）熊本出身。

1《南方スケッチ》 2《中支那スケッチ》…興亜院絵画班員（海軍報道班）として南方派遣（ジャワ・ボルネオ・セレベス・シンガポール）滞在時のスケッチ（写し）を、星野直樹（1892-1978、満州国国務院総務長官を務めた戦前の有力政治家。戦後は有力実業者）に贈呈した2冊。支援もしくは便宜を受けた御礼も兼ねていたか。

9《藤原まつり》…油彩画《藤原まつり》（井手宣通記念ギャラリー入口横の壁に展示）と比較すると、人物配置の違いなど作家の創意工夫の軌跡が感じられる。

10《自画像》…遺族のもとに残された写真から推察するに20代前半頃の自画像。

蜷川実花（にながわ・みか 1972-）東京出身。東京在住。

6《さくらん》…土屋アンナ主演の蜷川初監督映画「さくらん」のメインビジュアル。この土屋の花魁姿は、成人式に花魁コスプレをする女性を全国的に激増させる社会現象を生んだ。

7《mika》…蜷川が初めてファッション小物として日本刀をセットに導入した作品であり、以後「外国人の憧れるような派手な和風のイメージ」は蜷川のオリジナルな作風へとようになっていく。

寺田克也（てらだ・かつや 1963-）岡山出身。東京在住。

8《猫とドラゴン》…寺田はデジタル作画を1995-6年頃より開始しており、今やイラストレーターやマンガ家では一般的となったデジタル作画を草創期より取り入れた重要人物である。この作品は、作画用ソフト「Painter」を用いて制作。

石内都（いしうち・みやこ 1947-）群馬出身。東京・群馬在住。

11-15《不知火の指》…当館企画展「誉のくまもと」のコミッションワークとして、石牟礼道子の最晩年に撮影。石内は、石牟礼を象徴する身体の部位として、文筆に励んだ「手」と活動を支えた「足」を被写体として選び、そこに独自の美があると言及する。

江田豊（えだ・ゆたか 1931-）熊本出身。北海道在住。

16《象》…後年の作品はすべて「象」と名付けられ、モノクロームの色面による抽象を追求した。

宮本明（みやもと・あきら 1935-2014）旧満州出身、戦後熊本に引揚げる。

17《海の詩》…1970年代以降、有明海の干潟を描き続けた。少年期に引き揚げた旧満州への思いなどを重ね、雲天の凧いだ海が船や漁具とともに描かれる。

神野大光（じんの・たいこう 1954-）愛媛出身。熊本在住。

18《神野大光書『石牟礼道子先生句集 天』》…神野によると「石牟礼先生の書風は日本の古筆に似た正統的で雅美ある美しいものです。先生の書作品の傑作だと思います」とのコメントである。

19《神野大光書『風』》…2008年11月22日、熊本文学隊主催イベント「今、書に何ができるか。」（於：くまもと文学・歴史館）での神野と伊藤のトーク後に行われた公開揮毫。伊藤が最初に「風」と書き、その後神野が書き、最後に伊藤がめた。書体は、行書と草書を使用。作品の面白さとともに、熊本の在野の文化団体である熊本文学隊の活動史資料としても重要な意味がある。